

現代イギリスにおけるチャリティ研究

—大聖堂の街ダラムでの実践例から—

浦野 郁

1. はじめに

2004年から2008年にかけてイギリスに留学し、北部の街ダラム(Durham)で過ごしたが、その中で非常に印象に残ったことが一つある。それは、「チャリティ（慈善）」の精神が社会に根付いており、人々がごく自然に社会奉仕活動をしていることだった。チャリティを目的とするイベントの数々が身近にあふれ、しかも遊び心があり、楽しみながらより多くの人々が参加できるように工夫されている。日本でチャリティといった場合、どうしても「困っている人を助けるのだ」と肩に力が入りがちであるように思う。また、チャリティに従事した経験といえば、学校から参加した赤い羽根等の募金活動のみ、という日本人はまだ多いのではないだろうか（筆者もその一人である）。筆者はこれまでイギリス文学の研究者として主に小説作品を研究してきたが、イギリス人のチャリティへの熱意は、文化の側面としていつかしっかりと考察してみたいものの一つであった。

それが2019年度、総合文化研究所から研究助成をいただいたことで、長年心の中で温めてきた研究の第一歩を踏み出すことができた。本稿では、その成果としてまずイギリスにおけるチャリティとは何を指すか確認し、次に2019年夏に現地調査を行った“Durham Cathedral in LEGO”というチャリティイベントを紹介する。これによって、イギリスにおいてチャリティ活動がいかに身近で、遊び心に富んでいるかということを具体的に示したい。さらに後半では、このプロジェクトにボランティアとして関わった人々へのインタビューと文献調査から、「なぜイギリスではこんなにもチャリティが盛んなのか」という問いに対するひとつの仮説を導き出していく。

2. チャリティとは何を指すか——イギリスの場合

この節ではまず、チャリティとは一般的に何を指すのかを確認した上で、イギリスにおいてチャリティとして認識されている活動にはどのようなものがあるかを見ていく。『オックスフォード新英英辞典（*Oxford Dictionary of English*）』第2版で“charity”を引くと、以下のような説明が出てくる。

1 an organization set up to provide help and raise money for those in need（後略）

2 the voluntary giving of help, typically in the form of money, to those in need（後略）¹

このように、チャリティとは困っている人々（those in need）を救済する組織及び行為を指すこと

が分かる。またこの記述から、救済は主に金銭的なものであることも分かる。

しかしイギリスにおけるチャリティ活動は、この一般的な定義よりかなり広範に行われているようだ。公益法人協会編『英国チャリティ：その変容と日本への示唆』によれば、イギリスにおけるチャリティは長らく1601年に制定された「チャリタブル・ユース法（The Charitable Uses Act 1601）」をその法的拠り所としてきた。この法律では、チャリティとは何を指すかという定義こそしていないが、「チャリティ目的（charitable purposes）」の具体的な類型については、次の4つを挙げている。①貧困の救済、②教育の振興、③宗教の振興、④その他コミュニティ利益増進目的（『英国チャリティ』 53-56）。リストの初めに来ていることから「貧困の救済」は最重要の課題であったことが伺えるが、その他にも教育・宗教の振興、さらにコミュニティに良い効果をもたらす目的を持ったものであれば、チャリティと認められていることが分かる。

さらに1990年代後半からは、チャリティの現代的再定義と21世紀における在り方を模索する動きが活発化し、2006年には実に400年ぶりに大きく改正された新しいチャリティ法「2006年チャリティ法（Charities Act 2006）」が成立し、その後さらに整備され「2011年チャリティ法（Charities Act 2011）」に結実している。その中でチャリティ目的の類型は4つから拡充され、以下に挙げる13となっている（『英国チャリティ』 56-67）。

- ①貧困の防止および救済
- ②教育の振興
- ③宗教の振興
- ④健康増進または生命の救助
- ⑤公民性およびコミュニティ開発の振興
- ⑥芸術、文化、遺産または学術の振興
- ⑦アマチュアスポーツの振興
- ⑧人権、紛争解決もしくは和解の推進、または宗教的もしくは人種的和解または平等と多様性の推進
- ⑨環境保全および改善の振興
- ⑩他人の支援を必要とする若者、高齢者、病弱者、障害者、経済的困窮者その他不利な境遇にある者の救済
- ⑪動物愛護の促進
- ⑫国軍の能率または警察、消防、救助作業もしくは救急作業の能率の向上
- ⑬その他法に定めるチャリティ目的

ここでは旧「チャリタブル・ユース法」にあった4つの類型がより詳しく細分化され、「人種的和解または平等と多様性の推進」や、「動物愛護の推進」など、現代的な見地から追加されたものも見られる。こうした類型は現在実際に行われているチャリティ活動を反映していると考えられること

から、その数の多さと記述の細かさを見るだけでも、イギリスにおいてチャリティがどれほど盛んであるかは想像に難くない。このように、イギリスにおけるチャリティとは、日本人の私たちが考えるよりもずっと広範な活動を指すことをまずは確認しておきたい。それでは次に、かつて筆者が留学していたダラムにおける近年の実践例を見ていく。

3. 信仰の場での遊び心あふれるプロジェクト——Durham Cathedral in LEGO

3-1 活動の概要

ダラムはロンドンから電車で約3時間、エディンバラまで約1時間のイギリス北部の街である。駅に降り立つとまず目に飛び込んでくるのが街のシンボルであるダラム大聖堂だ。11世紀に建立されたノルマン様式の大聖堂で、向かいにあるダラム城（ダラム大司教のかつての住居）と共に、1986年にユネスコの世界遺産に登録されている（図1参照）。



図1 ダラム大聖堂（筆者友人撮影）

Durham Cathedral in LEGOは、大聖堂内部にある中世の修道士たちが生活したスペースを整備し、一般に公開する資金を募るためのチャリティイベントとして、2013年7月から2016年7月まで3年間かけて行われた。² 前節で紹介したチャリティの新しい類型に当てはめるなら、主に「⑥芸芸、文化、遺産または学術の振興」を目指したものと言えるだろう。具体的には、30万個のレゴブロックを組み合わせ、3.84（幅）×1.53（奥行）×1.7メートル（高さ）のミニ・ダラム大聖堂を作ることを目指した。人々はブロック1個につき1ポンドを寄付し、自分の手で置くことが出来る。最終的には世界195か国中182か国の人々が寄付し、30万ポンド（約4200万円）の資金集めに成功した。

完成したレゴ製の大聖堂は、現在も土産物コーナーの一角に置かれ、訪れた人は誰でも見ることが出来る（図2参照）。驚いたことに、このプロジェクトのために特注したピースはないとのことで、既製のレゴブロックだけでステンドグラスの窓、内部の説教壇や大時計、モザイクの床等、細部に至るまで精密に再現されており、非常に見ごたえのあるものである（図3・4参照）。制作期間中には時折レゴ社の社員が訪れ、ブロックが正しく組まれているか、倒壊の恐れ等がないかチェックを受けていたそうだ。



図2 レゴブロックで再現されたダラム大聖堂（筆者撮影）



図3（筆者撮影）



図4（筆者撮影）

3-2 「遊び心」と「楽しさ」

ここまでDurham Cathedral in LEGOの概要を見てきたが、このイベントがこんなにも多くの人々の心をつかみ支持を得たのは、そこに「遊び心」と「楽しさ」があったからではないだろうか。ダラム大聖堂は平時から誰にでも開かれ、地元の学校の生徒が作った作品が飾られたり、ダラム大学のコンサートや卒業式に使われたりしている。しかし信仰の重要な拠点であること、そして世界遺産にも指定されている歴史の重みから、一步足を踏み入ると厳粛かつ荘厳な空気が流れており、自然と背筋が伸びる場所でもある。その大聖堂を、子どもの玩具であるポップな色合いのレゴブロックで再現してみよう、という発想には意表を突く遊び心があるし、寄付が集まるにつれて普段見慣れた大聖堂のミニチュア版が徐々に姿を現すのを見守ることには、純粋な楽しさがあっただろう。

こうした「遊び心」と「楽しさ」こそが、筆者がイギリスにおけるチャリティに心惹かれた一番の要因である。本稿では他の例には触れられないが、筆者が留学中に見聞きしたチャリティイベントには、程度の差こそあれ、いずれもこの「遊び心」が感じられた。そこにあるのは「困っている人たちを助けるのだ」「コミュニティの役に立つことをしなければ」というような堅苦しい態度ではなく、自分たちも楽しい時間を過ごしそれが誰かのためになるなら嬉しい、という軽やかな態度だった。この良い意味での「軽さ」、自然体のままに慈善を行う姿勢こそが、チャリティが社会に溶け込んでいる証左であると見え、そこに称賛と羨望の念を抱いたのである。Durham Cathedral in LEGOは、そんなイギリスにおけるチャリティの在り様を象徴する例と言えるだろう。

3-3 資金の使い道——新しい展示スペース、Open Treasure

無論、チャリティイベント自体がいかに盛り上がり、多額の資金が集まったといっても、それが効果的に使われなければそのチャリティが真に成功したとは言えない。ここでは集まった資金がどのような展示を作るのに役立てられたかを見ていく。³

“Open Treasure”と呼ばれる新しい展示は、2016年7月に一般公開された。従来非公開だった中世の僧房部分に、大聖堂が所有する貴重な展示品の数々が並ぶということで大きな話題を呼んだ。その文化的な意義の大きさは、例えば全国紙の*The Guardian*が一般公開の数日前に“Durham Cathedral opens hidden treasures and spaces to public”として大きく報じていることから分かる（Sherwood）。今回の調査旅行ではこの展示スペースも取材したので以下に紹介したい。

Open Treasureの入口は大聖堂裏手の回廊部分にある。狭い階段を上ると視界が開け、ベネディクト修道会の修道士たちが寝起きしていた僧房部分に通じている。かつて小室が並んでいたスペースは仕切りが取り払われ、かなりの広さを持つホールとなっている（図5参照）。そこに古代イングランドを支配したローマ人、それに続くアングロ・サクソン人の文化を伝える石像が立ち並ぶ。このスペースは19世紀以降、図書室として使用されていたということで、両脇の棚には本が並び、突き当りには閲覧のために机と椅子が置かれている。とりわけ興味深いのは修道士たちの生活を知るコーナーだ。最新の展示技術を駆使して、修道士たちが聞いていたであろう生活音や、香や蜜蠟、キツンスパイスの香りまでが再現されている。子どもたちは受付でクイズや塗り絵等が入った小さな

リュックを渡され、親子で修道士の格好をして写真を撮って楽しめるコーナーもあった。



図5 中世の僧房が展示スペースに⁴

これだけでも充実した展示だが、Open Treasureはこれだけに留まらない。ホール左奥から細長い廊下のような部分に出ると、そこは企画展のコーナーだ。温度・湿度・光度が厳重に管理され、大聖堂の所有物の中でもとりわけ貴重なものが公開されている。筆者が訪れた際は、古代イングランド北部に襲来したヴァイキングにまつわる展示が行われていた。

さらに階段を下りて一階部分に戻ると、修道士たちの食事を賄った“The Great Kitchen”と呼ばれる場所に続いている。ここでは石造りのドーム型天井の下で7世紀の聖人カスバート（Saint Cuthbert, 635?-687）にまつわる宝物を見ることが出来る。そもそもダラム大聖堂はこの聖カスバートを祀るために建立されており、この部分は展示全体のハイライトと言える。カスバートの木製の棺や、彼が身につけていた金とガーネットのはいよう佩用十字など、7世紀から厳重に保管されてきた展示物を見ることが出来る。

ここを出ると、かつては貯蔵室だった場所がコミュニティ・ギャラリーになっており、地元の団体や学校が大聖堂をテーマに作成した作品等を展示するスペースになっている。Open Treasureはここで終わり、出口から大聖堂の回廊に戻ると外の光に包まれ、いにしえの時代から現代に帰ってきたという感じがする。展示品の数々が非常に貴重なものであることはいうまでもないが、それらが展示されているスペース自体が最大の展示品と言ってよく、特別な体験であった。実際オープンから一ヶ月で5500人、一年で44000人もの入場者を集めており、優れた展示が多くの人々を魅了していると言ってよいだろう。⁵

4. チャリティ参加者へのインタビュー

今回の調査では、実際にDurham Cathedral in LEGOにボランティアとして長期に渡り関わった2人から話を聞くことが出来た。E（仮名、60代女性）は筆者の長年の友人H（仮名、30代女性）の母親である。またEが活動を通じて知り合ったW（仮名、60代男性）もインタビューに応じてくれた。インタビューは2019年8月27日にHの勤務先である帝京大学ダラム校内で、Hも同席の上、約1時間行われた。以下ではまず、彼らがなぜこのチャリティに参加し、実際にどのような経験を得たかを紹介する。さらに、なぜイギリスではチャリティが盛んだと思うか、EU離脱に向けて変化が加速する今日においてチャリティの在り様は変化していると思うか、というより一般的な問いについても、Hを含めた三人で話してもらった。内容は日本語に訳して紹介するが、重要な部分には元々の発言も英語で付記している。

浦野（以下U）：まず初めに、ボランティアの概要について教えて下さい。

E & W：ボランティアは全部で約40人いて、地元の人、教会関係者、大学関係者、学生とあらゆる立場の人が参加していました。勤務時間は10時から16時で、平日の午前中と午後、週末でシフトを分け、基本的には各自が週1回ずつ勤務していました。寄付金の受け取りと管理に1人、寄付者にブロックを手渡して置いてもらう係に1人、計2名が常駐していました。特にブロックの大聖堂が大きくなってからは、子どもがふざけるなどして崩れてしまわないよう、常に見ていることも必要でした。

U：このボランティアを始めようと思ったきっかけは何ですか。

W：60歳で退職し、大聖堂の事務所でボランティアをしたいと思いましたが募集は終わっており、代わりにレゴ・プロジェクトを紹介されて興味を持ちました。プロジェクトの初めから3年間参加しました。

E：数年前に夫を亡くし、急に自分の時間が増えました。娘（H）よりこのボランティアを薦められ、Wより9ヶ月遅れて参加しました。活動を通じて沢山の素晴らしい人々に出会うことが出来て、正直なところプロジェクトが終わってほしくないと思えました。

U：ボランティアをやっていて一番楽しかったことは何でしたか。人との出会いでしょうか。

E：そうですね、間違いなくそう思います（Meeting people. Yes, definitely）。

W：特に、寄付をしてくれる人たちがどこから来たか、話を聞くのが楽しかったです。アメリカから来た人などもいて。

U：それに新しい友達も出来ましたね。あなた方のように…。

E：ボランティアチームのリーダーだったL（仮名）とは今も連絡を取り合っているし、Wや奥さんとも時々お茶をしています。新しい友人関係が生まれました。

H：(帝京大学ダラム校に) 留学している日本人学生もボランティアを手伝い、それによって彼らの英語力も向上しました。

U：イギリス文化をより深く知ることにもなりましたね。

H：そうですね、彼らにとっても大変良いプロジェクトだったと思います。レゴは誰でも知っていますから、言葉の壁があっても参加することが出来たのです。

U：ボランティアをされていて何か問題になったことはありましたか。

E：プロジェクトはとても順調に進んだのであまり思い浮かびませんが、2017年7月までに終わらせると決まっていたので、最後の頃は少し慌ただしくなりました。

U：この活動が終わってから何か別のボランティアに参加しましたか。

E：いいえ、特に何もしていません。そういえば、帝京大学にやってくる学生と時々交流しています。ボランティアといえるかどうかは分かりませんが。

W：大聖堂で週一回と、Palace Green Library (筆者注：大聖堂の傍にある由緒ある図書館) でもボランティアスタッフとして働いています。図書館では子ども向けのアクティビティを担当しています。

U：退職する前に何かボランティアをしたことがありますか。

W：いいえ、ありません。時間がなかったからです。

H：退職して何かボランティアを始める人は大勢います。ようやくその時間が出来て、あまりプレッシャーのかからない仕事をしたくなるのだと思います。

U：次にチャリティーやボランティアについてより一般的な質問をさせて下さい。イギリスでチャリティーが盛んなのはなぜだと思いますか。日本でも東日本大震災以来、ボランティアに参加する人が増え、チャリティーの選択肢も多様化していると感じますが、やはりイギリスの方がチャリティーは盛んだと思います。何がその背景にあると思いますか。

E：人々は貢献している、助けとなっている、何かを(社会に)返していると感じたいのだと思います (I think people like to feel they are contributing, helping and giving something back in certain circumstances)。特に動物愛護に熱心で、動物関連のチャリティーは非常に盛んです。ホスピスに関するものもです。ボランティアをする時間がある時といえば、学生時代と退職してからでしょう。自由な時間が出来ると、何か助けとなるようなことをしたくなります。実際に自分の手で援助できない場合には月に10ポンドの寄付、のような形で助けることになります。ダラムでもチャリティー団体の人が路上に立って「ドッグ・チャリティーに月10ポンド出しませんか」「航

空救急活動支援に月10ポンド出しませんか」などと声を掛けてくることがよくありますし、人々は概して協力的です。あなたのいう通り、これは文化的なものだと思います (it is a cultural thing)。自分は助けになっている、と思いたいのです (people like to feel they are helping)。

U：わたしの最初の予想では、宗教が背景にあるのではないかと考えていました。キリスト教的な博愛精神とも関係があるでしょうか。

H：そうですね、チャリティの始まりはそういうところにあったと思います。現在では必ずしも宗教的な理由からチャリティに参加するわけではないと思いますが、無意識的にはあるかもしれません。キリスト教はイギリス文化の一部ですし、社会の基盤になっているわけですから。ただ、チャリティをする時に宗教的理由を意識することは、教会や信仰に関するグループに入っているなど、アクティブな信者でない限りはないと思います。今のイギリスは非常に多文化的 (multicultural) になっているので、キリスト教が唯一の原動力ということはないと思います。

U：階級についてはどうでしょうか。階級制度はなくなってきていると思いますが、あなたたちの考え方に何らかの形で影響しているのでしょうか。過去には上流の人々が困っている人々のためにお金を使うことは社会的義務だったと思います。日本でももちろん豊かな人々と貧しい人々はいますが、上流階級、中流階級、労働者階級のように分かれてはいないので…。

H：階級制度は今もあると思います。ただ形が変わっただけです。上流、中流、労働者階級だけでなく、現在では他にも沢山の階級があると思います。

U：イギリスが多文化的になり、イギリス人ではなくなったからでしょうか。

H：その通りです。

W：そして今は皆、何でも欲しがりますから。私たちの世代が結婚した頃にはしばらく車もありませんでしたが、今は誰もが車やコンピューターを持っています。

E：ホームレスの人が増えていて、路上で物乞いをしています。あちこちでそういった話をよく聞きますが、何かあげていますか。

H：そういった人々にお金をあげることはしません。もし何かあげるのであれば、人々は食べ物や飲み物をあげているようです。本当にホームレスなのかどうか分からない場合もありますし、お金をあげてもドラッグやアルコールを買うために使ってしまうかもしれませんから。

U：イギリスは大きな変化に直面していると思います。EU離脱について大きく報道されています。日本で読んだ本 (ブレイディみかこ『労働者階級の反乱』を指す) には、EU離脱に多く票が集まっ

た背景には人々の現状への不満があると書かれていました。格差が大きくなり、富裕層と貧困層の隔たりは大きくなるばかりです。このような状況が、人々がチャリティーについて考える上で何らかの影響を及ぼしていると思いますか。社会に余力がないためにチャリティーに関心を寄せる人が減る、あるいは反対に、より多くの人が活動に関心を寄せているなど、何かあるでしょうか。

E：人々のチャリティーへの考え方そのものは変わらないと思います。

H：そうですね、難しいですが…例えば帝京大学で提携しているフードバンクの話では、需要が驚くほど伸びているそうです。500%増だとか、信じられないような数字を聞きました。失業中の人だけでなく、働いている人も——例えば看護師や、ゼロ時間雇用契約（zero-hour contract）で雇用されている人などが——フードバンクの助けを必要としているのです。⁶ EU離脱によって何が起ころか分かりませんし、貧困に陥っている人が本当に沢山います。このような問題があることを感じているからこそ、人々は寄付をするのだと思います。大手スーパーではフードドライブを行っています。買い物客にパスタやジュース、豆類の缶詰などを余分に買って寄付してもらう仕組みですが、協力している人をよく見かけます。小さな貢献ですが——2ポンド以下で買えるものは限られていますから——状況を改善するのに役立っていると感じたいのです（it's something small that you can contribute—under two pounds you can buy few things—but you feel like you are helping the situation）。見通しが立たない状況下でも、人々は自分にできることでチャリティーに貢献していると思います。

U：今後また他のボランティア活動に参加すると思いますか。

E：いまのところは何もしていませんが、やりたいと思っています。フードバンクもいいかもしれません。

W：いまやっているボランティアの仕事には満足しています。EU離脱には満足していませんが。

E：みんなそうだと思います。EU離脱問題を巡って、国が分断されてしまいました。この先どうなるか分からない状態です。

U：今日は参考になるお話が沢山聞けました。貴重な機会を本当にありがとうございました。

4. インタビューを巡る考察——なぜイギリスではチャリティーが盛んか

次に上記のインタビューを踏まえ、研究の出発点になった「イギリスではなぜチャリティーが盛んか」という問いを考察していきたい。研究開始時点での仮説として、①キリスト教的な博愛精神、②階級制度が生んだ「社会的義務」の感覚、の2つが背後にあるのではないかと考えていたが、現地調査及び文献調査からは、これらとは異なる要素も浮かび上がってきた。

まず宗教的理由についてであるが、インタビューではチャリティーとキリスト教信仰の結びつきは

否定されなかったものの、必ずしも直結するわけではないという見方が示されていた。イギリスにおけるキリスト教信仰はヴィクトリア朝期にダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）の進化論が登場して以来、徐々に衰退したというのが定説である。実際、筆者も留学中に周囲の様子を見聞きして、イギリス人の大半が生まれて間もなく洗礼は受けているものの、クリスマスや結婚式のようなイベント時にしか教会に足を運ばないという印象を持っている。

金澤周作『チャリティとイギリス近代』においても、チャリティとキリスト教の関わりは以下のように述べられている（本書は「チャリティ」と「フィランソロピ（博愛精神）」をほぼ同義語として区別なしに使用している）。

英国のフィランソロピは、きわめて大きなプレゼンスを有している。これは近代に限った話ではない。現在も英国社会は途方もない規模のエネルギーをチャリティに注いでいる。YMCA、オクスファム、動物虐待防止協会、救世軍、あるいはホームレスの自活支援のための雑誌『ビッグ・イシュー』など日本でもよく知られているものはどれもイギリスが発祥である。（中略）イギリスが今とりたててキリスト教信仰に熱心な国というわけではないこと、そして二〇世紀後半の一時期に福祉国家の代表と考えられており、現在もそうであることを思えば、この慈善熱は非常に奇異に映る。（9-11）

イギリス人の慈善熱がキリスト教信仰のみに還元できるものではないとしたら、そこにはどのような説明が存在し得るのだろうか。このような疑問を出発点に、金澤の広汎な著作は19世紀に実践されたチャリティを子細に検討している。

中でも筆者にとりわけ大きな示唆を与えてくれたのは、チャリティが「社交」と深く結びついたものだったという記述である。ヴィクトリア朝期に多数存在した篤志協会（主に社会の中間層の人々から成り、慈善の与え手としては数の上で最も多かった）では、集まった資金で誰を救済するか決める「投票チャリティ」が行われていた。この時、自分が支援したい人物に票が集まるようにするためには、寄付者の人的ネットワークが大きくものを言った。さらに、篤志協会が行う年次総会や晩餐会、音楽会などは資金集めの場であると同時に、寄付者たちがネットワークを強化し、拡大していく場でもあった。「『社交』こそが彼らの活動にとって本質的な戦略的意味を構成していた」（金澤 195）。チャリティと社交は、分かち難く結びついていたのである。⁷

上記のインタビューでも、レゴ・プロジェクトでボランティア活動をして良かったこととして、EもWも「人との出会い（meeting people）」を挙げ、各地から訪れた寄付者との実際のやり取りや、ボランティア仲間との間に生まれた友情について熱を込めて語っていた（これらの詳細については、前節の採録では割愛している）。さらにWは退職、Eは夫の他界によって一時的に社会との結びつきが薄れていたところに、文化的事業に寄与するボランティアを通じて「公的生活の場」を取り戻し、充実感を得たということも推察できる。さらには、寄付行為と社交が元来深く結びついたものだったとすれば、そこに「遊び心」が存在することの説明にもなるだろう。より多くの人々が集ま

るよう、魅力的なイベントを考えることが大きな意味を持つてくるからだ。近代イギリスにおいてチャリティーと社交が一体となっていたという事実は、筆者の抱いていた疑問に対する答えの方向性を指し示しているように思える。

次に、階級制度についてはどうだろうか。インタビューにおいては、多文化化する現在イギリスにおいて、かつての上流・中流・労働者階級という構造は崩れているという見方が示された。インタビュー内では詳細は明らかにされていないため、ここではイギリスの現状を日本に向けてリアルタイムで発信し続ける書き手、ブレイディみかこの著作を参照してみる。

ブレイディは『労働者階級の反乱』において、2016年の国民投票でEU離脱が決まった背後には、拡大し続ける社会格差と、保守党の緊縮財政によって犠牲を余儀なくされる労働者階級の不満があると指摘し、これがアメリカにおける「トランプ現象」とは本質的に異なるという見解を示した。さらに同著者の『子どもたちの階級闘争』では、著者がかつて保育士として勤務した「底辺託児所」——慈善団体が開設した、失業者・低所得者等の子どもを無料で預かる場——が、保守党政権下で補助金を大幅にカットされ運営を続けられなくなり、フードバンクに変貌する様を描いている。本書に登場するのは自立して生活を営む労働者たちよりも下層に位置する「アンダークラス（underclass, 低所得者階級）」の人々である。生活保護で暮らしている白人貧困層や、英語が話せないために職が見つからない移民、難民の人々が日常的に直面する困難が具体的に描かれている。

インタビューにおけるHの「他にも沢山の階級がある」という発言は、おそらくこうした人々のことを念頭に置いているのであろう。また、フードバンクへの需要が高まっていることから、日々の食事にも困っている人々が増えていることが分かる。細かな階級区分の問題以前に、こうした貧困の広がりを感じ現状を少しでも改善したいという気持ちが、多くの人々をチャリティーに向かわせているのかもしれない。EU離脱に向けて分断されたイギリスにおいて、チャリティーの内容は変化しているが、人々のチャリティーへの関心は薄れていない、とひとまずは言えそうである。

5. おわりに

イギリスではなぜこんなにもチャリティーが盛んなのだろうか——留学中に抱いた疑問と、遊び心あふれるチャリティーの数々に抱いた称賛の念から出発した本研究は、その背後にあるものとして「社交」との結びつきを探り当てた。またインタビューや文献調査を経て、イギリスが大きな転換期に直面していること、貧富の差が一層拡大し食べることに事欠く人々が増えているという、一般に知られている以上に危機的な状況も浮かび上がってきた。

今後の課題としては、19世紀に盛んに実践された「社交」と結びついたチャリティーが20世紀の間にどのように変遷して現代のチャリティーに結びついていくかを調査しなければならない。また、より多くのチャリティー活動を取材し、現地の生の声をさらに集める必要があるだろう。さらに、研究を進める上でチャリティーに関する非常に気になりな見方にも触れた。それは、イギリスの貧困問題をテーマに映画を撮り続けているケン・ローチ（Ken Loach, 1936-）の、「チャリティーというのは不公正を隠してしまいがちだが、むしろ不公正の是正こそが最終目的であることを忘れてはな

らない」という言葉である。⁸ これは、これまでイギリス社会におけるチャリティの普及を肯定的に見ていた筆者にとって、非常に考えさせられる言葉であった。「与える側」と「受け取る側」の二者を前提とするチャリティが、両者の間に存在する格差を覆い隠し、固定化することに繋がっているとしたら…。実は、この問題に関しては前出の金澤も触れている。「なぜかれらは、チャリティという方法で、他人の悲惨を和らげるにかくも大きなエネルギーを注ぐのか。これは、たんなる偽善なのか。それとも、現実の過酷な社会変動や搾取、窮乏を隠蔽しあまつさえ『危険』な貧者を管理統制する巧妙な装置でしかないのか」(10)。

もちろん、今回取材対象としたレゴ・プロジェクトは文化の振興を目的としたチャリティであり、話を聞いたEやWが純粋な善意と好奇心から活動に参加したことは疑いの余地がない。ただ、今後イギリスにおけるチャリティ活動全般を考える際に、ローチの見解は新たな考察の種になりそうである。そして本年1月末にはEU離脱が実現し、ほとんど間を置かずにイギリスを、そして世界を新型コロナウイルスの流行が襲った。今後コロナ禍に収束の兆しが見えるまで、従来の形でのチャリティ実践は難しくなるだろう。このことがチャリティの在り様にどのような変化をもたらすか等、これからも引き続き考察すべき問題が山積している。現代イギリスにおけるチャリティを巡る研究はまだ始まったばかりであり、今後も継続していきたいと考えている。

脚注

1. 電子辞書(CASIO EX-word)搭載版を使用したため、ページ番号なし。
2. 活動の詳細については、主にダラム大聖堂公式ホームページ(以下大聖堂HPとする)内の同チャリティに関するページを参照した。
3. Open Treasureの整備には総額約1億900ポンド(日本円にして150億円以上)が費やされており、Durham Cathedral in LEGOで集まった寄付金だけでなく、国営宝くじ(The National Lottery)からの多額の資金が投入されている。これに関しては大聖堂HP及びSherwoodの記事を参照した。なお以下のOpen Treasureに関する説明も、この二つを参照している。
4. Open Treasure内部の写真撮影は禁じられているため大聖堂HP内の画像を使用した。
5. オープンから1ヶ月の入場者数は大聖堂HP、1年後についてはChronicle LiveのHodgsonによる記事を参照した。なおOpen Treasureの一般公開は現在、新型コロナウイルス感染拡大中のため停止している。
6. 雇用主が必要とするときにだけ労働者に仕事を提供するという待機労働契約。週当たりの労働時間が保証されないため、『労働者階級の反乱』においても問題視されている。
7. さらに金澤は、この時代のチャリティがミドルクラスの女性にとって唯一の「公的生活の場」であり、そこで培われた政治意識が後の女性参政権運動への萌芽となった、という非常に興味深い考察も行っている(210-218)。これについても今後研究を深めたい。
8. ブレイディがYahoo!ニュースに寄稿した記事で「もっともな主張」として取り上げている。

参考・引用文献

- 1) 金澤周作、『チャリティとイギリス近代』, 京都大学学術出版会, 2008.
- 2) (公財) 公益法人協会編、『英国チャリティ: その変容と日本への示唆』, 光文堂, 2015.
- 3) ブレイディみかこ、『子どもたちの階級闘争』, みすず書房, 2017.
- 4) 同、『労働者階級の反乱: 地べたから見た英国EU離脱』, 光文社新書, 2017.
- 5) 同, 「『わたしは、ダニエル・ブレイク』はチャリティー映画じゃない。反緊縮映画だ。」, Yahoo!ニュース, 2017年3

月24日. 最終アクセス2020年12月9日. <https://news.yahoo.co.jp/byline/bradymikako/20170324-00069042/>.

- 6) Durham Cathedral(ダラム大聖堂公式ホームページ). <https://www.durhamcathedral.co.uk/>. Accessed 2020-12-1.
- 7) Hodgson, Barbara. "Guide to Open Treasure at Durham Cathedral which brings history alive for thousands of visitors". *Chronicle Live*. 2018-7-31. <https://www.chroniclelive.co.uk/whats-on/family-kids-news/guide-open-treasure-durham-cathedral-14973389>. Accessed 2020-12-6.
- 8) *Oxford Dictionary of English* (第2版). Casio EX-word XD-K18000 収録.
- 9) Sherwood, Harriet. "Durham Cathedral opens hidden treasures and spaces to public". *The Guardian*. 2016-7-21. <https://www.theguardian.com/world/2016/jul/21/durham-cathedral-opens-hidden-treasures-and-spaces-to-public>. Accessed 2020-12-6.